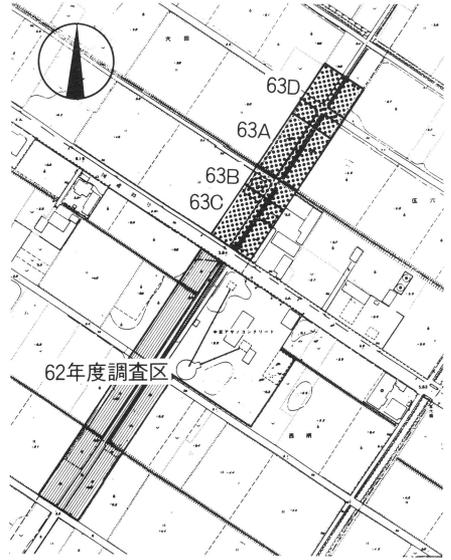


# お じ ま 岡 島 遺 跡

## 調査の経過

岡島遺跡は、矢作古川左岸の自然堤防上に立地する、弥生時代中期を中心とした遺跡である。付近を矢作古川のほか広田川などが流れており、これらの河川やその支流が、頻繁にその流路を変えて流れ、非常に不安定な場所であった事が想定される。昨年度の調査では、弥生時代岡島遺跡の西端に当たると思われる部分の調査を行い、遺構は希薄であったが、環濠の可能性も考えられる大溝（SD01）を検出し、多量の土器や木製品などが出度した。今年度は、国道23号線をはさんだ昨年度の調査区の北側をA～D区に分割して調査を行った。



第1図 調査区位置図 (1/5000)

## 調査の概要

層序は基本的には昨年度と同じであるが、今年度は昨年度第1、第2とした遺構面の間で新たに遺構面を検出した。このため今年度は遺構面の名称を変更し、先に調査の完了したA・B区を中心として調査概要を述べることにする。

**上面** 昨年度の第2遺構面に相当する。遺構は十数条の溝と土坑を数基検出し、大半はB区で検出した。B区では、ほぼ平行で南北方向に走る10条ほどの溝を検出した。また、これらの溝と直行する、東西に長い同方向の大型土坑を数基検出した。遺構内より出土した遺物の量は極めて少なく皆無に近い状態である。このため上面及び各個別の遺構の時期決定は困難であるが、昨年度の状況より中世に属し、沖積低地の再開発によるものと考えられる。

**中面** 今年度新たに検出された遺構面である。遺構は竪穴住居4軒、土坑十数基、溝数条自然河道などを検出した。A区北東角で遺構が集中して検出され、B区では希薄であった。竪穴住居は、遺構が密なため重複が激しく、全体を知ることができるものが無いが、ほぼ同規模の方形プランである。住居内より高蔵期併行の土器がまとまって出土している。A区北隅より調査区西半で自然河道を検出し、調査区の大部分を占める。

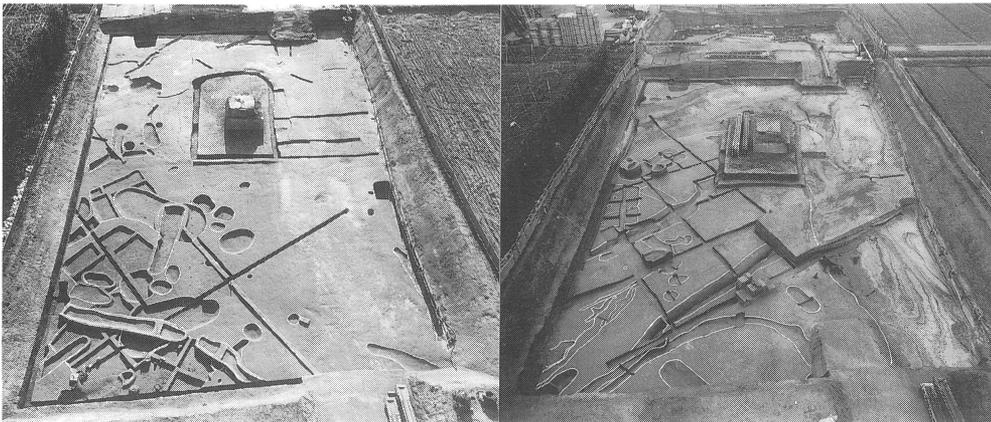
**下面** 昨年度の第1遺構面に相当する。中面より下面への掘削途中、青灰色砂質シルト層

中で土器などを若干含む黒褐色有機質土の広がりを検出した。遺跡全体に広がるものではなく局所的であり、また高低差も見られた。人間の生活活動に起因が求められるものであるが、明確な落ち込みが見られず他所から流れ込んだ2次堆積によるものと考えられる。遺構はA区では数条の溝と数基の土坑などを検出した。地形は北東に向かって高くなり、溝は自然河道に流れ込んでいた。B区では中面の遺構下で新たに自然河道を検出した。遺構は自然河道のみである。A区では検出途中に古井期及び瓜郷期併行の土器が主に出土しており、尾張地方からの搬入と思われるものなども出土している。遺構内の土器はほとんど瓜郷期併行のものである。調査区南隅の河肩で土坑内より古井期併行の壺胴下半部が倒立した状態で出土した。B区では新たに検出した旧河道内より古井期併行の土器がかなりまとまって出土した。昨年度は古井期併行の遺構が大部分であり瓜郷期併行の遺構は大溝（SD01）のみであったのに対し、今年度検出した遺構は大部分が瓜郷期併行であり古井期併行のものは少数であった。

#### まとめ

今年度の調査ではA区中面で検出した高蔵期併行の竪穴住居と、昨年度検出した遺跡の西端に当たると考えられる大溝（SD01）から、従来国道23号線よりも南部とされていた岡島遺跡の範囲が、国道をこえて北東に広がるということを確認し、A区下面の地形も北東に向かって高くなっていることより、むしろこの方向に遺跡の中心があった可能性が高くなった。また、当時非常に不安定な状態であったことが想定されるこの地において、生活跡である竪穴住居を検出し、短距離であっても地点が変わると様相を異にすることが判明した。河道の動きなどによって、短時間の間に生活域の幾度か移動があったことが想定される。以上が今年度までの岡島遺跡の調査結果であり、今後、岡島遺跡を広範囲に捕えて行く上での一助となろう。

（野口哲也）



A区全景（北より） 左：中面、右：下面